

クラシック音楽をもっと身近に モーストリー・クラシック10 vol.329
OCTOBER 2024

MOSTLY

2024

10

スメタナ 生誕200年

ドヴォルザーク 没後120年

CLASSIC

チェコ音楽の 歩き方

特別インタビュー

ペトル・ポペルカ



プラハ紀行 / スメタナ、ドヴォルザーク 生涯と作品
高関健 わが祖国を語る / フス派のコラール / ヤナーチェク
競演 フェスタサマーミュージザKAWASAKI 兵庫芸文の蝶々夫人

CD
プレゼント
抽選

表紙：プラハの「高い城」から
望むモルダウの流れ



チェコ音楽の歩き方

■ スメタナの生誕200年、ドヴォルザークの没後120年 … ■

今年、「チェコ音楽年2024」

本国チェコでは、スメタナの生地でのオペラ《リブシエ》上演など特別な催しが続いている

《わが祖国》、《新世界から》、チェコ協奏曲…

なじみ深い音楽の魅力はどこからくるのか？

チェコの楽団や音楽家の演奏の特色は？

現地取材を交え、掘り下げていく



S m e t a n a



スメタナ

ドヴォルザーク

D v o ř á k

ドヴォルザークホールからみたプラハ城



プラハで野外演奏



《わが祖国》
野外演奏の
ポスター



「高い城」で行われたプラハ交響楽団の
《わが祖国》野外演奏と演奏を聴く人々

プラハのスメタナ記念館は、モルダウ(ヴルタヴァ)川のほとりにあった。河畔にしつらえられたレストランのテラスを抜けて近づくと、作曲家の像が立つ。ヤナギだろうか。垂れ下がる葉の陰に顔が隠れている。国民的作曲家として仰ぎたてまつらなくても、おのずと威厳がにじみ出てくる風情である。

窓外のモルダウ 流れ速く

館内には《わが祖国》をはじめ《売られた花嫁》など代表作のパネルが展示されていた。スメタナの使った指揮棒を模した棒を当てると曲の「節」や、名場面が流れ出す仕掛けが施されている。《わが祖国》のコーナーで聴けるのはもちろん、「モルダウ」。モルダウは、首都の街を貫くにしては流れが速く、アレグロ・コモード(ほどよく快速)にの曲想もなるほど、と思わせる。同じ川でも対岸が遠く、海や湖をも連想させるロシアのヴォルガ川のような大河とは風情が違う。ところどころしぶきが上がり、川面を清冽な空気が通う様子が2階の展示室からもみて取れる。

第1曲の題名、「ヴァシエフラド(高い城)」は、神話の世界の架空の場所と思ひ込んでいた。地図を見て不明を知る。記念館や、キリスト教の聖人像が並ぶ美しいカレル橋を街の中心と捉えれば、南方向のそれほど遠くない距離にある。その地でプラハ交響楽団の《わが祖国》の野外演

文 藤盛一朗◎本誌編集

静寂と高揚 わが祖国

モルダウを見下ろす「高い城」 跳ねるリズム 踊りだす子どもたち



奏会が開かれると聞いた。

夕刻、同名の地下鉄駅を下りると、もうスマホのグーグル地図は不要だった。開演時間が迫り、人々が急ぐ。城跡の一角は自然公園の趣で、初夏のさわやかな空気が頬を撫でる。野外ステージの設けられた広場に出ると、人、人、人。3千人は下らないだろう。中央の椅子席を囲む

ように人垣ができ、肩車の親子、最初から木にもたれたり、地面に座ったり、遠巻きにゆっくり楽しもうという人々もいる。

ハープの弾きだしに集中

司会の話している間はざわついていた会場が、しんと静まり返った。ハープで奏でられる全曲の始まりを人々が意識していることが分かる。本来はしゃべったり、飲んだり食べたりしてもだれもとがめない気の置けない会場で、みなが耳を澄ませる。この曲がチェコの人々にとって本当に特別な音楽なのだということが伝わる瞬間だった。

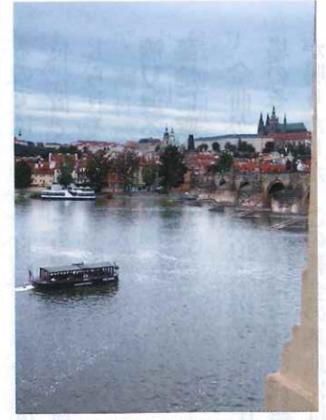
この曲のハープは、天上の、というつぎものの形容より、もっと豊かで人間的で低音がよく響く。吟遊詩人がつまびく形をとっていても、お話のはじまり、はじまりというより、心の琴線に直接触れてくる。コーラル風の金管の響きは荘厳で温かく、侵しがい尊厳を思わせる。それを引き継いだ弦は、よく歌う。

ホルカに自然な反応

「モルダウ」が始まる。木陰に座る年配の女性が指揮をするように手を動かし始めた。やはり、音楽に没入している。この曲と「高い城」の作曲年は1874年。150年の時の流れが埋まり、音楽は今、生まれたかのように生き生きと響く。中間部で子どもが踊り出した。



カレル橋からほど近いスメタナ記念館



スメタナ記念館から見えるモルダウ川

舞踊起源の鋭いリズム、豊かな旋律に本質

ポペルカ チェコ音楽を語る

モラヴィアの地方色
際立つ個性



©千葉秀河

チェコの俊英、ペトル・ポペルカが7月、プラハ放送交響楽団を率いて来日し、スメタナの《わが祖国》などで傑出した演奏を聴かせた。同楽団の首席指揮者兼芸術監督に加え、9月からはウィーン交響楽団の首席指揮者に就任。欧州での注目が一層高まっている。シュターツカペレ・ドレスデンの元コントラバス副首席奏者としてオーケストラの演奏経験も豊富なポペルカに、チェコ音楽の魅力を語ってもらった。

聞き手 藤盛一朗◎本誌編集

——チェコ音楽の独自性をどのように捉えますか？

軸をなすのはメロディーであり、リズムの鋭敏な感覚です。そして、ヤナーチェクに代表されるモラヴィア地方の音楽が三つ目の特色です。チェコの音楽は、踊りがベースになっています。中でも中心はポルカであり、とりわけスメタナ作品ではポルカはもつとも重要な要素です。

ドヴォルザークは、メロディーの大家です。チェコの民謡はともにも旋律が豊かで、オーケストラも旋律をよく歌います。ブラームスと比較してみましよう。ブラームスの音楽ももちろん、メロディーが豊かですが、ドイツの音楽ではメロディーより、建築物のような構造が先です。チェコやロシアでは、メロディー自

隣のお父さんも、ダンス風の動きをみせる。民族舞踏のリズムとメロディーに全身で反応している。トマーシユブラウネル指揮の演奏は、日本の楽団よりずっとリズムが鋭い。私たちが何気なく聴く曲のエピソードが、チェコの人々には自然にポルカと受け止められ、民族の記憶がすぐらわれるのだろう。



スメタナやドヴォルザークが墓地に眠る聖ペトロ・パウロ聖堂



モルダウのほとりに立つスメタナ像

「シャルルカ」でも同じ。身体を動かす人が現れる。「ボヘミアの森と草原から」では、踊る姿がさらに増えた。

「ターボル」では、有名なフス派の讚美歌旋律《汝ら神の戦士らよ》が現れる。この旋律は、スメタナが国民劇場のこけら落としのために書いたオペラ《リプシエ》の最後にも出てくる。チェコの国民意識の柱のような役割を担っていることが分かる。終曲の「ブライニーク」で、この讚美歌旋律と、全曲の冒頭旋律が融合する。熱狂というより、じんと内から湧き上がってくるような感動。チェコの人々の心を満たすのは、愛国心や祖国愛というどこか政治性を帯びる言葉より、だれに強制されるのでも、声高に叫ぶのでもない郷土愛に通じるのではないか。自国を一方的に優位に置く態度とも対極にあると感ぜられる。

鳴り渡る聖堂の鐘 臺地に眠る作曲家たち

全曲が終わり、拍手がやむと、広場のそばの聖ペトロ・パウロ聖堂の鐘が鳴りだした。この教会の臺地には、スメタナやドヴォルザークが眠っている。

窪地の広場の斜面を登ると、モルダウの眺めが開けた。《わが祖国》を聴いたばかりの人たちが顔を輝かせ、初夏の夜の涼やかな風に吹かれていた。

体が重んじられます。ドヴォルザークは、多くのメロディーを生み出した作曲家であり、チャイコフスキーと並び立つ存在です。

——そのロシアのメロディーとの違いはどうお考えでしょうか？

チャイコフスキーやラフマニノフ、グリンカ、ポロディンの書くメロディーは、空間的な広がりを感じさせます。国土が大きいですから。そして、調性感にも富んでいます。

チェコの音楽は、センチメンタルではありません。心を震わせますが、センチメンタルやオペラティックな表現とは異なるのです。

——チェコを旅して感じたのは、同じ平原でもロシアとは異なることです。ロシアでは大地が果てしなく広がりますが、チェコの場合は教会が見え、隣村や町がすぐ現れます。

その通りです。その相違がメロディーの違いを生むのかもしれない。チェコの風景は、シンプルです。自然は、親しみを感じさせます。それほど寒くも暑くもなく、暮らすのに楽です。

民謡が別々 リズムはより自由

——そして、ヤナーチェクに代表され

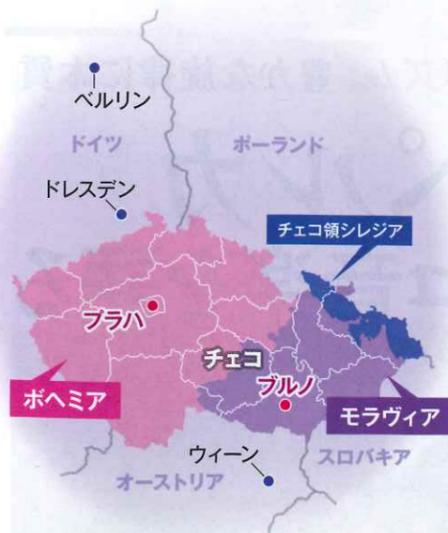
るモラヴィア地方の音楽が大きな特色をなすのですね。

ヤナーチェクは、モラヴィアの民謡を収集しました。多様な方言を聴き、分析しました。モラヴィア音楽は、リズムが自由です。民謡はパルランド(話すよう)であり、レチャタティーヴォ風です。

モラヴィアとチェコ(ボヘミア)の違いは大きい。民謡は別々です。(打楽器のツインバロンは、ヤナーチェクの音楽では典型的ですが、スメタナは用いません。モラヴィアのリズムはより自由で、その音楽はもっと明快です。ハンガリーに共通する面もあります。

暗めで大きな音のドレスデン

ボベルカさんは、シュターツカペ



プラハ放送響

ともに聴き、旋律を歌う



来日公演で《わが祖国》やドヴォルザーク作品を指揮したボベルカ (AMATI提供)

未来を示し、真実を求める **わが祖国** Smetana

感情と追憶、愛にあふれる **チェコ協奏曲** Dvorak

ドレスデンの奏者だった経歴をお持ちです。プラハとドレスデンはさほどの距離ではないのに、音色はだいぶ異なります。

優れたオーケストラには、固有の音があります。ドレスデンとライプツィヒも100キロしか離れておらず、同じザクセン州ですが、シュターツカペレとゲヴァントハウスの音色は、まったく異なるのです。

シュターツカペレの音は、はっきりそれと分かります。弦楽器にまず焦点を当てて音が形作られる。そして劇場オーケストラとして、高い柔軟性を持ち合わせています。シュターツカペレの演奏にメトロノームは似合いません。オペラはいつもテンポが変わるからです。その一方でシュターツカペレは、リズムカルな音楽が得意ではありません。そこがチェコの楽団との大きな違いです。チェコ

はリズム感に優れています。シュターツカペレもチェコも弦が強力ですが、個性は異なります。ドレスデンは大きな音で演奏し、音色が暗い。チェコはもっと明るく、もっと明瞭な演奏をします。言語も関係があります。チェコ語は音節が明瞭で、流れるようなフランス語とは異なります。

——プラハ放送響の特色は？

城。王たちがそこで暮らした場所です。チェコの歴史のシンボルです。
川を旅する「モルダウ」
——ハープで始まる動機は何を表しているのでしょうか？

豊かな未来です。チェコという国の偉大な歴史を物語る最初の部分。「未来をみてください」「その豊かさを想像してください」。

第2曲「モルダウ」(ウルタヴァ)は、だれもが知っている名曲です。見事なのは、川、水、音楽が完全に一体化していること。聴く者は川を旅します。村のほとりに来るところは叙情的。タッタタッタというの典型的なボルカ。危険な場所(聖ヤンの急流)を通り、プラハに流れ入るところは、とりわけ美しい。ヴィシエラドの下に至り、二つの動機がともに奏でられます。

作曲術が際立つ 終曲の2曲

——第3曲の「シャルカ」以降はがりりと雰囲気が変わります。

もつともドラマティックな曲です。伝説「乙女戦争」の女性、シャルカによる復讐劇が描かれます。第4曲の「ボヘミアの森と草原から」には、チェコの自然に対するスメタナ



ドヴォルザークやスメタナが創作の源泉としたチェコ(ボヘミア)の農村風景

の純粋な愛が表れています。そして、「ターボル」と「プラニーク」の2曲。終曲のこの二つは、私から愛する音楽です。ターボルは、チェコ西部の市。フス戦争でプロテストントのフス派の拠点となりました。スメタナは、フス派の賛美歌を用い、それを軸に曲を作りあげています。「プラニーク」は山の名前。チェコの伝説では死んだ兵士たちが眠っており、チェコが攻撃を受けると、立ち上がって助けにやってくる。率いるのは、チェコの聖人、聖ヴァツラフです。

——チェコの人々にはフス派の賛美歌はどのような存在なのでしょう？
たくさんさんの音楽に使われていま



「《わが祖国》の冒頭は未来を示し、フス派の賛美歌旋律は真実を求める闘いを表すと語るボベルカ ©千葉秀河

鋭いリズム感と、奏者同士がともに旋律を歌うこと。柔軟性。そして、弱音から強音にいたるダイナミックレンジの大きさです。ホルンは、大きな音より、セクシオンとしてともに演奏することを尊びます。

本物の音楽の歴史を生きる

——チェコはなぜこれほど多くの傑出した音楽家を生みだすのでしょうか？

人口1千万人の小国ですが、本

物の音楽の歴史があるということでしょう。私たちにはスメタナ、ドヴォルザーク、ヤナーチェク、マルティヌーがいます。彼らはチェコ音楽を独自のものにしたのです。その歴史を私たちは生きています。

——来日公演では、生誕200年のスメタナの代表作《わが祖国》を演奏しました。

比類のない音楽です。第1曲「ヴィシエフラド」(高い城)は、プラハの古

す。だれもが知っており、(権力者でもあったカトリック教会に異議を示した)フスとフス戦争の歴史は、チェコの歴史の重要な二部です。この賛美歌の旋律は、真実を求める闘いを意味すると私は考えます。

帝国主義と別物の愛国心

——とても愛国的な音楽と感ぜられます。

その通りです。ですが、帝国主義的な愛国心とはまったく別物です。とてもユニークな愛国的感情です。

——子供時代の《わが祖国》との出会いを教えてください。

家では父や祖父が熱心にラジオの定時ニュースに耳を傾けていました。8時、9時、10時……。時代代わりにはハープの冒頭旋律が流れるのです(笑)。

学校では「モルダウ」を聴きました。そして、5月12日。「プラハの春」音楽祭の開幕で毎年演奏される《わが祖国》は、テレビで全国放映されます。子どものころから、耳を傾けました。

私たちプラハ放送交響楽団は、スメタナ生誕200年の今年、シーズンの閉幕にこの曲を選びました。入場券は3、4カ月前に売り切れ。急

きよ2回目の演奏会を設定しましたが、こちらも1カ月前に完売しました。

——チェコ音楽家は、ドヴォルザークの年でもありません。チェコ協奏曲の第2楽章、第3楽章はとりわけ深い感興にあふれていますね。

チェコの音楽の中でもっとも重要な曲であり、協奏曲のジャンルの中でも傑出しています。協奏曲というより、むしろ「チェコ付き交響曲」です。中でも第3楽章の終わりにかけての部分は、胸を打ちます。内面のドラマであり、感情と追憶、



©千葉秀河

ペトル・ポペルカ Petr Popelka

1986年、プラハ生まれ。プラハ音楽院とフライブルク音楽大学でコントラバス演奏を専攻。プラハ放送交響楽団とバイエルン放送交響楽団のアカデミー生を経て2010～19年、シュターツカペレ・ドレスデンに在籍。コントラバス副首席奏者を務める。指揮をアラン・ギルバート、ヤーブ・ヴァン・ズヴェーデンらに学び、NDRエルブフィルの指揮フェローに。ノルウェー放送交響楽団首席指揮者、ヤナー・チェク・フィル(チェコ)首席客演指揮者を経て2022/23シーズンからプラハ放送交響楽団首席指揮者兼芸術監督。22年にウィーン交響楽団、東京交響楽団を初指揮。24/25シーズンにウィーン響首席指揮者に就任予定。25年2月のNHK交響楽団定期公演でヤナー・チェクの《シンフォニエッタ》など2プログラムを指揮する。

そして愛に満ちています。内声が興味深く、全パートに重み

——ドヴォルザークの独自性は？

ドヴォルザークは、スメタナ以来のチェコの伝統に連なる作曲家です。チェコ音楽にルーツを持つ。ドイツ音楽の性格もありますが、ドヴォルザーク自身、チェコの作曲家と自分を規定しています。

弦楽四重奏曲やピアノ三重奏曲など室内楽作品も多い。それらの中で気づくのは、すべてのパートに等しい重みが与えられていることです。それは第2ヴァイオリンやヴィオラが非常にもしっかり書かれている。モーツァルトと比べられます。ドヴォルザークの作品の内声も、とても興味深いのです。

——ドヴォルザーク自身が楽団でヴィオラを弾いていたことも関係しているのでしょうか。

その通りです。オペラの《ルサルカ》。オーケストラの内声は非常に豊かで、隠れたテーマが素晴らしい筆致で書かれています。

次号もポペルカのインタビューを掲載し、ウィーン交響楽団との活動や、来年2月のNHK交響楽団定期公演への来演についての言葉を紹介します。

「真実を求めよ、真実を貫け」

《わが祖国》のクライマックスをなす「ターボル」「プラニーク」で響くフス派賛美歌。15世紀、カトリック教会の腐敗を批判し、異端とされて火刑にふされた元プラハ大学長の聖職者、ヤン・フス(1370年ごろ～1415)は今、どのようにチェコで記憶されているのか。プラハ探訪の初日、旧市街広場のヤン・フス像を通り、ゆかりのベツレヘム礼拝堂に赴くと、ある種の肩すかしをくらった。礼拝堂は社会主義時代に再建され、今は大学の施設であり、プラハ放送交響楽団などの演奏会場としても使用されている。純粋な宗教施設として継承されているのではない。

フスは、この礼拝堂の説教師でもあった。「当時の教会の司祭には、旧市街地に立つヤン・フスの像と、フス派の聖ミクラーシュ教会。現代のチェコではフス派の信徒は少ない。



抗議の人、フスの精神 現代も生きる

レジスタンスの合図にも用いられた賛美歌旋律

文藤盛一朗◎本誌編集

思いあがった言動がありました。毎度のミサでパンをキリストの聖なる体に変化させているのだから司祭はいエスを一度産んだだけの聖母マリアよりえらい、などというばかげた話がフスには許せなかった」と、礼拝堂のガイド、ウルヴァンコヴァーさんが語る。けた外れの財産を持ち、腐敗も広がる教会に疑問や反感を持つ人は少なくなかった。

フスはルターをはじめとする宗教改革の先駆者である。ミサ典礼の改革も主張した。フスへの貴族の支持は広がり、死後には、教会と対立するフス派戦争に発展した。いったんは過去の歴史に消えたものの、真つ向から当時の権力者、「教会」を批判した態度は19世紀、「チェコ民族精神の誇り」という記号として生まれ変わる。スメタナが目撃し、第二次大戦後には社会主義政権にも評価され、礼拝堂には、宗教画風でもあり、社会主義リアリズムにも通じる壁画が描かれた。だが、なんだ政権のプロパガンダ

宗教改革の先駆者

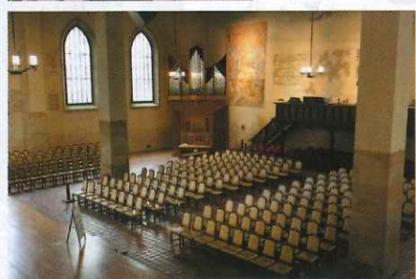
「真実を求めよ、真実に聞け。真実に学び、真実を愛せ。真実を語り、真実を求め、死すとしても真実を貫け」——この言葉はやがて、「真実は勝つ」という格言として、社会主義政権の終焉に至る人権擁護や民主変革の歩みの中でもチェコでは再三思い起こされることになる。

だったのかと思うのは早計だった。《わが祖国》のみならず、スメタナの国民オペラ《リブシエ》でもこの賛美歌の旋律は響く。プラハ城に近い「プラハの春」音楽祭事務局で、ディレクターのトロヤンさんが語った言葉には重みがあった。「ナチス・ドイツに対するレジスタンス活動の合図にも用いられた。ドイツとの関係をはじめ、複雑なチェコの歴史の中でさまざま命を得た旋律なのです」

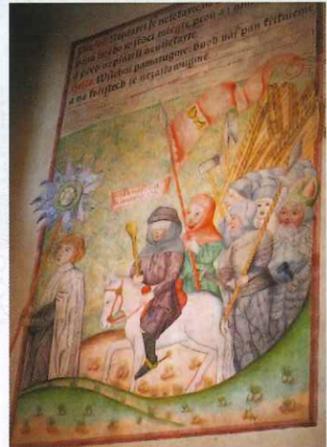
フスは、次のような言葉を残している。

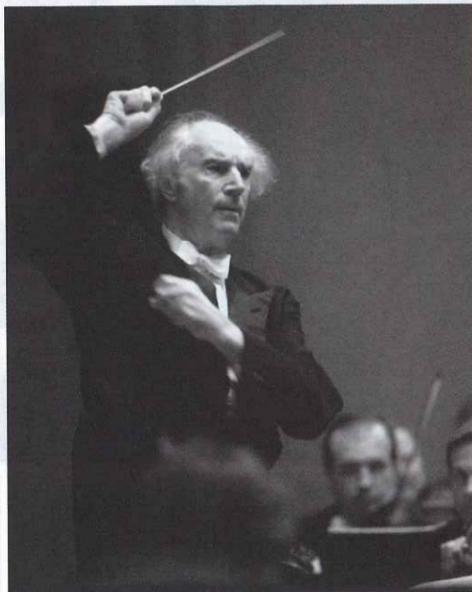
「真実を求めよ、真実に聞け。真実に学び、真実を愛せ。真実を語り、真実を求め、死すとしても真実を貫け」——この言葉はやがて、「真実は勝つ」という格言として、社会主義政権の終焉に至る人権擁護や民主変革の歩みの中でもチェコでは再三思い起こされることになる。

ペトル・ポペルカが《わが祖国》で用いられた賛美歌旋律について、「真実の探求」と語ったのはこういう背景もあったのだと思いたい。



ベツレヘム礼拝堂の外観(右上)と、内部の様子(右下) フスの火刑(中)や、フス派戦争(左)の様を描いた壁画は社会主義時代に描かれた





体制転換後の1990年、《わが祖国》を指揮するクーベリック

音楽祭の前身は、1939年に創設された「プラハ5月音楽祭」。その年の3月にナチスドイツがチェコスロバキア(当時)を占領する中、国民劇場で9つのオペラ公演と演奏会が行われた。演目は《わが祖国》のほか、ドヴォルザークの交響曲第9番《新世界より》、スメタナのオペラ《リプシエ》など。そして閉幕にはベートリヴェンの交響曲第9番が演奏された。

クーベリック チェコフィルと推進

この時、できあがった。現在の音楽祭の原型がすでにこの時、できあがった。

そして、「プラハの春音楽祭」は終戦翌年の1946年、チェコフィルの創立50周年を記念し、始まった。牽引したのは、当時の首席指揮者、ラファエル・クーベリックだった。だが、母

マタチッチピアノを弾き解説 事件直後にN響を指揮

NHK交響楽団の名譽指揮者だったマタチッチの名前が飛び出し、音楽祭や、チェコの歴史との距離がぐっと縮まったような気がした。日本では、1984年です」とトロヤンさん。

外国人として初めて、1984年の開幕演奏を指揮するマタチッチ



シオスタコーヴィチとムラヴィンスキーの写った「60年史」のページを開くディレクターのトロヤンさん(左)と広報担当のネヴォラロヴァーさん



今年の開幕公演で《わが祖国》を演奏するペトレンコ指揮ベルリンフィル (5月12日、市民会館「スメタナ・ホール」) ©Pera Haska



ペトレンコ指揮ベルリンフィル 《わが祖国》を開幕演奏

今年の「プラハの春」音楽祭は、キリル・ペトレンコ指揮ベルリンフィルの《わが祖国》の開幕演奏に沸いた。演奏がセンセーショナルだったことと、聴衆の熱狂の様子は写真からもま

チェコ事件、ピロード革命…

「プラハの春」音楽祭 20世紀の歴史刻む

1990年クーベリックがわが祖国、バインスタインは第九 ムラヴィンスキーやシオスタコーヴィチも出演

文藤盛一朗◎本誌編集 写真提供: いずれも「プラハの春」音楽祭

伝えられてきた逸話がよみがえる。クロアチア(当時はユーゴスラヴィア)出身のマタチッチは、1968年、当時のチェコスロヴァキアの体制内改革運動、「プラハの春」で進む民主化に強い関心を寄せ、ソ連主導のワルシャワ条約機構軍の戦車が8月、プラハを蹂躪するチェコ事件をわがことのように悲しんだ。その直後の9月12日、N響との《わが祖国》を前に、マ

タチッチは、リハーサルでピアノを弾きながら楽員に曲想を伝えた。「ここがチェコの人々が心を動かすところなのだ」と解説したという。「プラハの春」音楽祭は、如実に時代を映してきた。1989年暮れ、非暴力で社会主義体制からの転換を果たす「ピロード革命」が実現すると、翌90年の音楽祭には、2人の世界的指揮者とその舞台に戻ってき

さまざまと伝わってくる。

それにしても、今年にはスメタナの生誕200年。音楽祭の開幕を告げる重要な演奏会に、ベルリンフィルを招き、チェコの心ともいえる《わが祖国》を演奏する。チェコフィルはもとより、チェコ人の誇りが傷つくのではないかと思えば、そうではないらしい。「世界的と言われる外国のオーケストラの《わが祖国》の演奏に、首をかしげたことはありません。でも、今回は特別でした。本当に圧倒的な演奏でした」と、音楽祭事務局広報のイヴァ・ネヴォラロヴァーさん。ディレクターのパヴェル・トロヤンさんは「ペトレンコとベルリンフィルが演奏すれば、《わが祖国》がチェコだけの存在ではなくあります。ベルリンやルツェルン音楽祭でもこの曲を演奏してくる。《わが祖国》の素晴らしさが世界に伝わるのは、私たちにとてもうれしいことです」



歴史的な第九演奏を指揮し、拍手を受ける
バーンスタイン(中央)やポップ(その左2人目)、
チェコ・フィル



神々しい歓喜主題
民主化祝う歴史的演奏

そしてバーンスタインが入ってくる。わずか半年後に死去したとは信じられないエネルギーとオーラ。第一楽章の重々しいテンポと、すさまじいフォルテは、抑圧の時代やそこからの解放の願いが込められた表現であることが伝わってくる。第2楽章のティンパニや弦の激しさは、不正義や抑圧への怒り。熱情が噴出する。異例なほど遅く、歌い込まれる第3楽章を経て、低弦の歓喜主題を導く時のバーンスタインは、まさに祭司のような表情で神々しいほどの演奏を引き出す。ソプラノのルチア・ポップはスロヴァキア出身。人の声が集まってこそ響く合唱の力、そして入魂の管弦楽演奏。楽員の胸には白いバッジが付けれられ、ビロード革命の原動力となった「市民フォーラム」の頭文字、OとFが記されていた。90年の「プラハの

春」の第九は、まさに歴史的な演奏だった。
事務局長の2人は、60周年の2006年に編まれた本を開き、他の巨匠たちや作曲家とのかかわりを話してくれた。バーンスタインは第1回と第2回に連続出演した後、チェコの社会主義化を理由に出演を断った。ただ、西側との交流は積極的に行われ、カラヤンがベルリン・フィル、ペームはウィーン・フィルと来演。そして1967年には若き小澤征爾がプラハ交響楽団の指揮台に立ち、ベルリオズの《ローマの謝肉祭》序曲やブラームスの交響曲第1番を指揮した。1990年には、チェリビダッケがミュンヘン・フィルとブルックナーの交響曲第7番を演奏しているのも興味深い。
**ムラヴィンスキーが8番
シヨスタコーヴィチは演奏も**

そして、とりわけ「60年史」で破格の扱いを受けている写真は、シヨスタコーヴィチとムラヴィンスキーだった。ムラヴィンスキーは第1回から招かれ、チェコ・フィルを指揮してシヨスタコーヴィチ作品を演奏。シヨスタコーヴィチはその翌年の第2回、オイストラフやチェコのチェリスト、ミロシユ・サードロとともに自身のピアノ三重奏曲第2番のピアノを弾いている。ムラヴィンスキーは、チェコ・フィルとシヨスタコーヴィチの交響曲第8番をチェコ初演した。
また、ロストロポーヴィチの名も、

月にベルリンで第九をバーンスタインが指揮したことを紹介し、「自由」を称えようとしたシラーが検閲を懸念して「歓喜」の言葉を使ったエピソードを語った。スメタナの《リブシエ》序曲のファンファーレに続いて、貴賓席にヴァーツラフ・ハヴェル大統領が入場する。民主化の旗手であり、新生チェコのまさに象徴である。

た。最初期の立役者だったクーベリックと、バーンスタイン。クーベリックは《わが祖国》、バーンスタインは閉会公演のベートーヴェンの交響曲第9番を指揮した。オーケストラは、ともにチェコ・フィルである。
6月2日のバーンスタイン指揮の公演の映像を見る。会場の司会者は、ベルリンの壁崩壊後の1989年12

音楽祭には特別な存在として刻まれている。1950年の「プラハの春」国際コンクールで、旧ソ連のダニール・シャフランとともに優勝。音楽祭の常連となった。シヨスタコーヴィチやプロコフィエフ、ブリテンといった現代作品を積極的に演奏する一方、ロストロポーヴィチ自身も、ドヴォルザークのチェロ協奏曲の演奏では、共演したタリツヒの助言を真摯に受けたという。最愛の妻となるヴィシネフスカヤと出会ったのも、プラハの街だった。

ロストロポーヴィチ
ソ連軍撤退で舞台に復帰

「私もシヨスタコーヴィチも、共産党体制を憎んでいた」と後に振り返るロストロポーヴィチは、1968年のワルシャワ条約機構構軍の侵攻と、改革派幹部の追放に憤り、「ソ連軍が撤退しない限り、プラハでは演奏しない」と表明した。後にソ連市民権を失い、パリを本拠に。ロストロポーヴィチがプラハに戻るのは、91年7月を待たねばならなかった。ソ連軍が完全撤退した翌月だった。ドヴォルザークのチェロ協奏曲を演奏し、後半でシヨスタコーヴィチの交響曲第5番を指揮したプログラムにロストロポーヴィチの深い思いがうかがわれる。

東欧諸国には、ソ連・ロシアへの反感や警戒が根強く存在する。2002年に侵攻を受け、今も攻撃にさらされるウクライナのように、ロシアの音楽を演奏しない国もある。だが、

1947年の第2回音楽祭に参加するため、プラハの空港に降り立った
シヨスタコーヴィチ(中央右)とムラヴィンスキー(左隣)、オイストラフ
(右隣)(プラハの春音楽祭「60年史」から)



2002年の開幕演奏会で《わが祖国》を指揮する小林研一郎

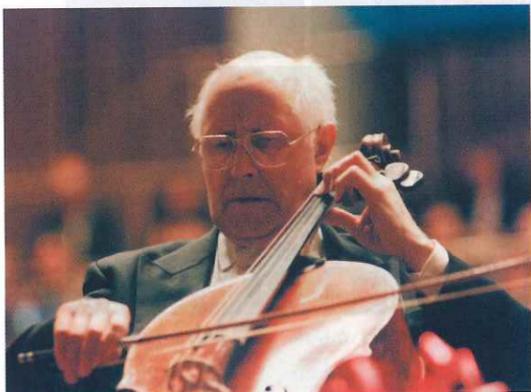


開幕演奏の指揮を担った
小林研一郎

「プラハの春」音楽祭は、日本の音楽家とも深く結びついてきた。代表格は、小林研一郎。1991年には日本フィルを率いて来演。2002年にはチェコ・フィルを指揮し、開幕コンサートで《わが祖国》を演奏する大任を果たした。オーケストラは高関健指揮群馬交響楽団、小泉和裕指揮東京都交響楽団などが参加している。この10月には全プログラムが発表となるが、日本の楽団の新たな参加も期待できるかもしれない。

チェコでは、シヨスタコーヴィチは、忌避されるどころか、20世紀最大の作曲家の一人として今も深い敬意を持たれている。その公平さが印象的だ。

トロヤンさんは「80回の節目となる2025年は、シヨスタコーヴィチの没後50年。ネルソンス指揮ボストン交響楽団が来演し、交響曲第11番《1905年》を演奏します」と語った。来年はシヨスタコーヴィチとマラーに焦点を当てることを決めており、ヤー・ヴァン・スヴェーデン指揮シカゴ交響楽団はマラーの交響曲第6番《悲劇的》を演奏する。



1997年の音楽祭で演奏するロストロポーヴィチ